

## 「抱きしめる」という効果

竹澤 博美<sup>1)</sup> 相守 節子<sup>1)</sup> 牧野 雅美<sup>1)</sup> 堀 親秀<sup>2)</sup>

要 旨：保育士が積極的に園児を抱きしめる事が、園児の協調性、落ち着き、不安に影響を与えるかを検討した。協調性、落ち着き、不安の程度の指標としては、それぞれトラブルの回数、一定時間座っていられなかった回数、日本版CBCL(Child Behavior Checklist) 検査を用い判定した。その結果、すべての指標が有意に減少し、保育士による抱きしめる行為は、集団生活の場において、協調性と落ち着きを増し、不安を軽減することが示唆された。

【Key words】 保育園児、抱きしめる、不安

## はじめに

校内暴力、いじめ、無気力などの心の歪から生じる行動は乳幼児期の母子関係に問題があるとも言われ、その大きな要因の1つとして、家族関係の希薄化などによるスキンシップの減少が挙げられている<sup>1~3)</sup>。

一方、「抱きしめる」というスキンシップは、情緒の発達や安定を促すうえで、必要で大切な行為と言われている<sup>4,5)</sup>。

そこで今回、集団生活の場において、保育士が積極的に抱きしめていく事が園児の協調性、落ち着き、不安に影響を与えるかを検討した。

協調性の判定としてトラブルの回数を、落ち着き具合の判定として一定時間座っていられなかった回数を、更に不安の程度として日本版CBCL (Child Behavior Checklist) 検査を指標とした。CBCL検査は、米国T.M.Achenbachらが開発した子供の情緒や、行動の問題を包括的に評価する方法であり、幼児用(2, 3才)、学齢児才用(4才~18才)に分かれている。ひきこもり、身体的訴え、不安/抑うつ、社会性の問題、注意の問題、非行、攻撃的行動および性的問題の8カテゴリーについて評価でき、児童思春期保健研究所が日本語版を作成した。今回は、幼児用、学齢児才用を用い、不安/抑うつのカテゴリーについて検討した。

## 方 法

当園在籍の平成17年度2才児~5才児、101名(男61名、

女40名)を対象として、1月中旬から2月末まで、通常に接する期間と、積極的に抱きしめる期間、それぞれ3週間を設定し、園児の協調性と落ち着き具合を比較した。

更に平成18年度当園在籍2才児から5才児112名(男58名、女54名)を対象として、6月末から3週間、積極的に抱きしめる期間を設定し、その前後で不安の程度を比較した。

抱きしめ方法は、保育園に来て保護者と離れた時、昼寝の前、友達と喧嘩をした時、保育士から注意を受けた時、一日の保育終了時にそれぞれ5秒程度、言葉をかけながら、正面から包み込む様にしっかりと抱きしめた。

協調性の指標として、友達とのトラブル回数(叩く、押す、引っかく、言い争う、取り合う、など)の全数を、9時から16時までの間カウントし比較した。

落ち着き具合の指標は、定時のおやつ時間(25分間)に、座っていられなかった延べ回数を調べた。

不安の程度は、日本版CBCL検査を指標とした。抱きしめ期間の前後で、担当保育士が園児の行動を項目ごとに、0=あてはまらない、1=ややまたは時々あてはまる、2=たいへんまたはよくあてはまる、の3段階に分類し、CBCL検査のスコアリング表に基づいたT得点で算出した。統計的検定は、Wilcoxon t検定(対応あり)を用い、 $p < 0.05$ を有意水準とした。

## 結 果

トラブル回数は、実施前は $35.0 \pm 4.05$ 回/週であったが、積極的な抱きしめ期間中のトラブル回数は $24.5 \pm$

<sup>1)</sup> 新田塚保育園

<sup>2)</sup> 福井総合病院 小児科  
(受付日 2007年3月)

2.46回/週に有意に ( $p < 0.01$ ) 減少した (図1). 特に2才児では, 叩く, 押す, 引っかくといった体を使った乱暴な行為が8割以上減少した.

おやつ時間に座っていらなかった回数は, 実施前は $25.0 \pm 8.14$ 回/週であったが, 期間中は $13.3 \pm 4.13$ 回/週に有意に ( $p < 0.05$ ) 減少した (図2). 実施前は注意をしてもすぐにまた寝そべったり, 立ったりする姿が見られたが, 期間中は注意を受け, 抱きしめられると, 暫く落ち着いて座っている事ができた.

CBCL検査の不安項目のT得点は, 高得点であるほど不安の程度が高いという検査である. 実施前は $53.3 \pm 0.39$ 点であったが, 実施後は $51.8 \pm 0.29$ 点と有意に ( $p < 0.01$ ) 減少した (図3).

各項目の年齢別の違いでは, 落ち着き具合で, 2才児の定時のおやつ時間に座っていらなかった延べ回数が半減した.

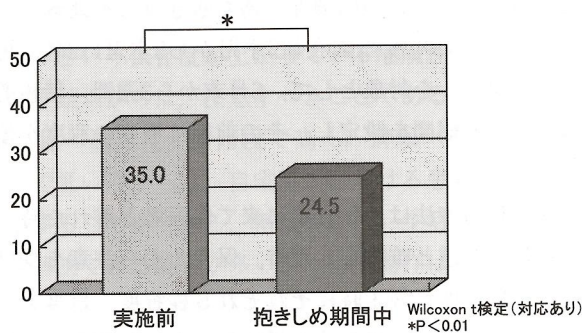


図1. トラブル回数の変化(週平均)

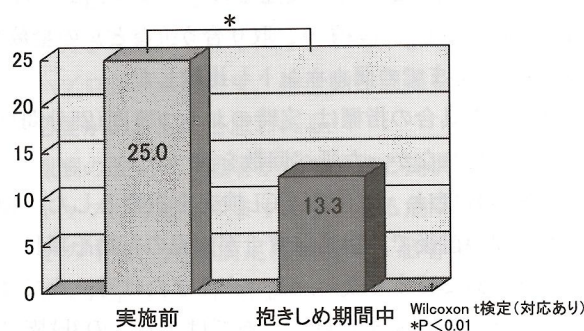


図2. おやつ時(25分間)、座っていらなかった回数の変化(週平均)

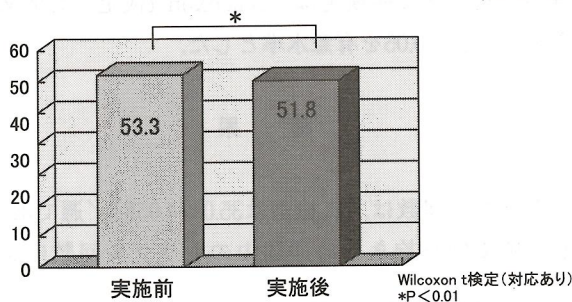


図3. CBCL検査(不安項目)によるT得点の変化

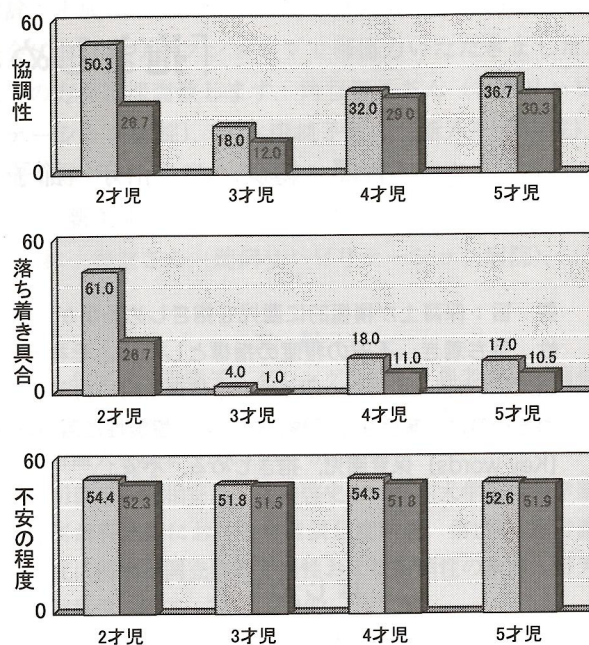


図4. 年齢別の変化

## 考 察

保育園という集団生活の場において, 保育士による抱きしめる行為は, 協調性と落ち着きを増し, 不安の程度を軽減する事が示唆された. これらの結果のほかにも, 現場の印象として, 保育士に対し消極的だった園児が, 積極的に関わりを求めてくる姿が見られた. この事は, 抱きしめる行為は保育士への信頼感情を高め, 安心して自分の感情が出せる様になる効果もあるのではないかと考えている. 今後は, 長期的に継続して行う事で園児の甘えや積極性がどの様に变化するのか, 家庭でも行うことで变化するのか, 自宅での様子の変化もまじえて検討していきたいと考えている.

## 文 献

- 堀田芳子: 保育及び子育てに関する調査研究報告書. 日本保育協会, 東京, 2005, p77
- 岡村博行: ネオネイタルケア. 1997; 10: 1110-1114.
- 瀧井宏臣: こどもたちのライフハザード. 岩波書店, 2004, 東京, 2004, p176-178
- 日本抱っこ法協会ホームページ: 子どもの森 <http://www.geocities.jp/holding86/> (2006年5月現在)
- 松尾恒子: 心と体の健診ガイド-幼児編. 日本小児医事出版, 東京, 2000, p 233-237
- 涛川栄太: 抱きしめる教育. サンマーク出版, 東京, 2002, p9-12